信州におけるMLA連携で聞いてみたいこと、考えてみたいこと





信州大学　附属図書館
渡辺 匡一

まずは、おさらいから

「MLA連携」って…

ミュージアム（Museum）・図書館（Library）・文書館（Archives）の連携のこと。それぞれの頭文字をとってMLAと呼ばれる。いずれも文化的情報資源を収集・蓄積・提供する公共機関であるという共通点を持ち、情報資源のアーカイブ化等の課題を共有していることから、近年、連携の重要性が認識されてきている。

文科省HP(用語解説より)

これから、ということですね

情報資源のアーカイブ化等の課題を克服するために連携する重要性が認識されてきた背景(きっかけ)についても確認しておきましょう。

日本でもっとも早い動きは

アート・ドキュメンテーション学会(JADS，1989年)

ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館／博物館、図書館、アーカイヴ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

(JADS HPより)

活発化するのは、10年前ぐらいからでしょうか

『MLA連携の現状・認識・将来』(2010)
『図書館・博物館・文書館の連携』(2010)
『つながる図書館・博物館・文書館』(2011)

MLA連携という機運を急速に推し進めたのは、

デジタル技術

＋

コンピュータネット環境

デジタル化すれば、MLAの各資料を総合的に扱える

&

ネットを使用すれば、デジタル化された資料を簡単に提供できる

確かに、この何年間で、ネットで様々な資料が見られるようになりました。

「MLA」「データベース」で検索をかけてみると、様々なデータベースが作成されていることがわかります。

→国会図書館、国文学研究資料館、早稲田大学とかのデータベースをよく使います

しかし

文科省の用語解説では、情報資源のアーカイブ化等の課題を共有していることから、近年、連携の重要性が認識されてきている

とされていました

明治9年(1876)6月21日、116号)

長野新聞

第百拾六号

明治九年六月廿一日晴 水曜日

憲暦計正午七十二度

今般本縣地方刑行ヲ我ガ國新社ニ命セラレタリ因ヲ將來本縣雜事ヲ掲載ス

縣下雜報

○

縣廳が一昨十九日の朝丸燒になりました多分は揚呑所の燒より出火なたろうとのこと御類焼失なたといふ風説だと松本より昨日歸りし人のそなし

○

人の行狀見て我がふり直せといふ世の諺のとおり備もその施行をどうして見たいと思ってこゝろがける感心な宜かとあーは當縣下第一大區佐久郡にて神津包重といふ人は貧父神津半衛右が本年五月のころ旅にかもむれしうえにに多年倉庫に積置し米を貳升づゝと蓄貯ためー天保錢をそへて居村は勿論四里四方の窮民へ合貳百俵施行さまたータむなしく兎爲をかくつんより抽出して稼をためかゝる施主に成りたいものだと第九大區七小區長久保町の大非さんより五報知

○

薩に肥後の國菅治郡熊野濱にて前夜人を呼びわるへは其身より分りをとあちなと其おそろーき形容に諸人がのゝきおそれて逃何ものなし然るに彼熊本鎭士楚田忠太郎といふ人が魂りかゝッて何者ありやと問しに彼の怪物が答に我れは海中にて司配る尼彦といふものあるが本年より六ケ年の間だは豐年なれども當年は國に中劇烈の難病が流行て六分通りも人が死そなり依て我が形容を寫して朝夕見るものは此疱瘡を免れん此事を告んため毎夜この所へ上りて待ち居たるかりと言しに諸人尼彦入道と號け有こ此の形容をうつして持居るが諸新聞にも出てあるといふ風聞だが不穩のことあるかより調をさせて遣られたーたらその圖面を記載してお目にかけまそが記者は斯ことは決して知りませんし諸新聞にも出ていないがえーと不開化の諸人方には誠に困り升儒様なものを寫して見るより諸新聞を見て身の養生を能くかやりなさい

○

サア諸君うつうつしてゐられませんが當縣下第十大區九小區小縣郡馬越村にては本年四月中より天然痘が流行て三四人も死ンだといふが政府におゐても御心配なされて御手當いお世話をなさるも外ではない人民保護のわり難い御趣意であり升徳く諸新聞にもある通り再天然痘をするものが世間には幾らもある郡で生れもつつぬれ共に成ッたり二ッとない大非本命を亡ーたりするおそれに本月上仰頭石川縣よりも天然痘がた流行えゝら種痘法をせられよと當縣廳へ御報知があったといふ御布達もあり一度種痘をえたらら宜とおもふそ再も再三も種痘をして天然痘瘡の惡症を受ぬやうに種防法なさい

○



田窪直規(２０１０)では、日本のMLA連携が容易に進まない理由として３点あげています。

１．A(文書館)の知名度が低く、館数(自治体72館，国立公文書館HP)も少ない。

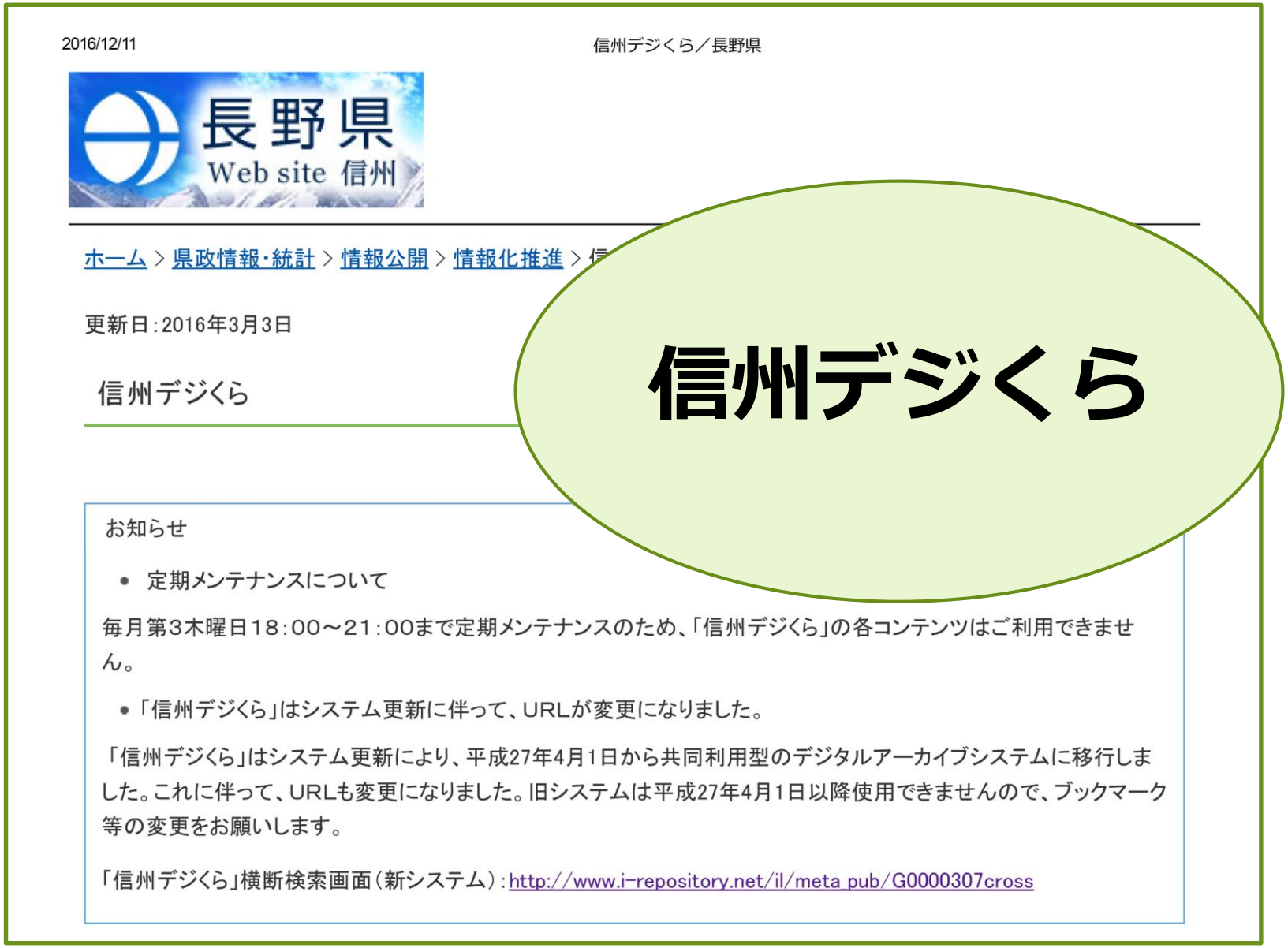
２．日本では、MLAが一体的に扱われない。

ML＋公民館 ⟷ A

※欧米では「文化(遺産)機関」「記憶機関」として一括りに扱われる

３．コンテンツのデジタル化を促進させる政策が弱いこと。

※技術的な政策だけではなく、利用者の視点、利用者の開拓も含めての文化政策の欠如。事業(コンテンツ)はあるけど支える(継続する)政策(ポリシー)がない



長野県の誇る、MLAの成果だと思うのですが、2010年以降更新されなくなってしまいました。

実は

大学図書館は、「一人MLA」だったりします。

図書館業務とは別に

絵画コレクション（M)

旧制松本高等学校所蔵のものが信州大学文理学部に引継がれ、さらに附属図書館に移管された。油絵を主とする19点、藤島武二「ローマの風景」、岡田三郎助「信濃の春」など

小谷コレクション（L or M)

信州大学附属図書館が所蔵する山岳関係資料コレクション「小谷コレクション」の中の和古書・古地図等 ⇒ データベースあり

多胡文書（A or M）

松本藩の藩校崇教館の教授を代々世襲していた多湖家に伝わった「多湖文書」等の和図書・近世古文書 ⇒ データベースあり

画像データベースに関しては予算の問題もあり、

書誌データ作成には、人的問題もあり、

とは言え、

大学図書館の果たす役割(ポリシー、ビジョン)の中で、情報のアーカイブ化と発信を位置付けていかなければなりません。

折しも、国立大学図書館協会では、今年、「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン2020」を策定しました。

http://www.janul.jp/j/organization/regulations/janul-2020vision.pdf

２１世紀のネットワーク型のコミュニケーション様式が急速に普及し、知のあり方が大きく変わりつつある今、国立大学図書館機能の強化と革新に向けての基本理念(ビジョン)を定めたものです。

柱は３本(新たな「モノ・場所・人」)です。

1. **知の共有　〈蔵書〉を超えた知識や情報の共有**
   蔵書だけではなく、デジタルコンテンツも含めた「知の整備」
2. **知の送出　新たな知を紡ぐ〈場〉の提供**
   図書館の中だけではなく、ネットワーク上に、新たな知を送出するための場を設ける。
3. **新しい人材　知の共有・創出のための〈人材〉の構築**
   新たな〈蔵書〉〈場〉における多様な知の創出を担う人材のための制度を整備する。

「ビジョン２０２０」をもとに
信州大学図書館では、信州の地にある大学図書館としての
「ビジョン」を策定することにしました。

図書館におけるMLA関連の業務も、ビジョンに則して、組織的に継続性をもたせたものにしていきたいと考えています。

さて、お聞きしたいことです

興味深い取り組みが、継続的・構造的なものになるためには、信州ならではのポリシーが不可欠だと思います。「行政」の問題だと思いますが、ご意見をお聞かせください。

次にお聞きしたいことです

ここからは、それぞれのお立場から、具体的なお話をお願いします(以下は例えば、です)。

現在、しなの美術館、松本市博物館は、リニューアルへ向けて動いています。
どのような、「新しい」施設となるのか、MLAとの関係からお話いただけないでしょうか。

情報の発信には、ある程度の「早さ」と「量」が必要だと思いますが、いかがでしょうか。

連携して発信していく情報が、ネット検索したときにでてくる他の(無数の)コンテンツより「魅力的」であるためには、どのような工夫が必要でしょうか。

MLAそれぞれの強み例

